

子ども向けコンサートの成立と発展

— イギリスにおける Sir Robert Mayer の音楽啓蒙的取り組みに着目して —

水 引 貴 子

日本児童教育専門学校

The Formation and Development of a Concert for Children:

Focusing on Sir Robert Mayer's Music Enlightenment Efforts in the England

Mizuhiki Takako

Japan Juvenile Education College

Abstract : The purpose of this study is to elucidate the music education initiative of Sir Robert Mayer, who held concerts for children in England from the end of the 19th century, on a long-term basis, and to clarify the historic relationship between children and classical music.

The characteristics of Sir Robert Mayer's concerts were as follows: ① He arranged for top-class performers and commentators even if the audience comprised children. ② Most of the performers were British, and British works were included in the program. ③ A small admission charge was collected from the children.

The purpose of these concerts was audience education. Further, Mayer hoped to improve the situation surrounding the British music (education) world, and also wanted to alter the view held by other countries of Britain as a country with underdeveloped music.

In addition, Mayer later established a support group for young musicians, "Youth & Music." Unlike the forced child prodigy training of the 19th century, he adopted a method to increase musicality while respecting the intentions of each young person.

Key Words : Children's concert, music education, England, Sir Robert Meyer, education to foster talent

要旨 : 本研究は、イギリスで19世紀末から子ども向けコンサートを永続的に開催してきたロバート・メイヤーの音楽啓蒙的取り組みに着目し、歴史的に子どもとクラシック音楽がどのようなかかわりをしてきたのか明らかにすることを試みた。

彼のコンサートの特徴は、①子ども相手であっても一流の出演者と解説者を用意したこと、②彼らの多くはイギリス人であり、プログラムにはイギリス人の作品が含まれていること、③わずかではあるが入場料を徴収することである。その目的は、イギリス音楽（教育）界を取り巻く状況の改善のためと、他の国からもたらされた音楽後進国というイメージを払しょくするための聴衆育成であった。

また、ロバートは後に若い音楽家の支援団体「Youth & Music」も立ち上げる。19世紀の強制的な神童養成とは異なり、本人の意思を尊重しながら音楽的才能を伸ばす方法を採用した。

キーワード : 子ども向けコンサート、音楽教育、イギリス、ロバート・メイヤー、才能教育

1. はじめに

子どもは音楽とどのようにかかわり、才能を開花してきたのだろうか。クラシック音楽において、ヨーロッパでまだ徒弟制が機能していた18世紀初頭頃までは、他の職業と同様であった。つまり、音楽家の家に生まれた者は幼少期から訓練を受けて、一人前になれば宮廷や町で演奏活動を行うのである。それが1750年頃から市民による音楽文化が花開き、演奏家が「子ども」であることに価値が見いだされるようになると、モーツァルトに代表されるような「神童」と呼ばれた子どもの演奏家が世の中で注目される。特に19世紀初頭は「神童ブーム」が訪れ、神業的なテクニックを駆使した子どもの演奏がもてはやされた¹⁾。しかし、実際には彼/彼女らは幼少期から虐待に近いような練習に明け暮れなければならない、厳しい練習や過酷な演奏旅行の果てに、大人になる前に亡くなるケースも多々あった。そのような事実も「天才の早世」として神話化されていた。

このような現象は、公教育が確立し児童労働が問題視されるような近代にまだ移行しきれていない曖昧な時期だからこそ、成立しうるのである。さらに、同時期にはルソーに代表されるような子どもと自然を結び付けた「子ども期の独自性」という、新しい子ども期に対する思想も広まり、大人にとって神童は「自分では実現しえない望みや夢、それを投影するための偶像」(ホフマン：2004：336)と捉えられていた。

このように、19世紀に「神童」と呼ばれた子どもたちのパフォーマンスは、音楽の才能の有無や本人の意思とは関係なく、精根が尽きるような訓練の賜物であった。

それから時代が下り19世紀末から20世紀初頭になると、ラジオや蓄音機の発明と普及も相まって子どもたち自身が聴衆となるコンサートが誕生し広がりを見せる。クラシック音楽と子どもたちの関わり方が変化していくのである。

本稿では、子ども向けコンサートをイギリス²⁾各地で永続的に行き、子ども向けコンサートの存在を世に広めた草分け的存在の一人であるロバート・メイヤー (Robert Mayer) の取り組みおよび思想について、自著やコンサートプログラム、雑誌記事の分

析から明らかにしたい。それにより、神童とは異なる「音楽と子ども」との関係性、および音楽的な才能に対する社会的まなごしの歴史的な示唆が得られるだろう。

2. 先行研究

コンサートの歴史および鑑賞教育の先行研究は豊富にあるが、子ども向けコンサートやロバート・メイヤーに特化した研究は少ない。

例えば、子ども向けコンサートの歴史に触れた数少ない著書として、大友らのものがあげられる。本著では、毎年、東京交響楽団がサントリーホールで開催される「こども定期演奏会」の分析を中心に、「子どものためのコンサートの歴史と意義と未来を考えようとするもの」(大友：2015：5)である。

また、アメリカでの鑑賞教育を研究対象としている武内 (2007、2008) は、鑑賞教育の一環としてコンサートの性格を持つウォルター・ダムロッシュ³⁾のラジオ放送番組「音楽鑑賞アワー」の分析を試みている。イギリスでの鑑賞教育の研究は小林 (2011a、2011b) にみられ、教材および鑑賞教育を推進したスコールズの著書から、その特徴を捉えようとした。

イギリスの子ども向けコンサートの研究は竹山 (2009、2010) のものがあり、19世紀末の音楽雑誌の記事等から、イギリスでの子どものコンサートの誕生とその背景を探った。

3. 世界の初期子ども向けコンサート

本稿で扱うコンサートとは、「事前に開催が告知され、チケット代を支払えばだれもが入場できる公開された演奏会」とする。もともとコンサートは大人の社交場として16世紀ごろに誕生し、発展してきたため、子どもは入場することができなかった。そのような状況で、唯一ホールに入れた子どもは、冒頭で述べたように、神童だけであった。しかし、19世紀半ばから20世紀初頭になると、多くの国々で、一般の子どもを聴衆の対象とした「子どもコンサート」が行われるようになる⁴⁾。

例えば、アメリカは世界的に見ても子ども向けコンサートの誕生と広まりが歴史的に早い。初期のものでは1858年にオハイオ州のシンシナティでの「青

少年コンサート」が行われている。1865年にはセオドア・トマスによってコンサート・シリーズ⁵⁾が行われ、1891年にはダムロッシュによる6回連続の「青少年コンサート」が開始する。これらのことから、子ども向けコンサートは19世紀末までに、ある程度の認知度を獲得していた。その後も継続的に子ども向けコンサートは行われ、1958年開始のバーンスタイン⁶⁾による「青少年コンサート」は有名である。

また、ドイツでは1898年にハンブルクの教員合唱連盟による小学生のためのコンサートが行われ、その後はハンブルク交響楽団による子どもたちのコンサート・シリーズへと引き継がれている。

日本においては、1916年2月10日から3月25日まで三越呉服店で開催された「児童用品展覧会」に関連して、期間中三回にわたってお伽会と家庭講演会とともに家庭音楽会が開かれたのが、子ども向けコンサートの先駆けといえるだろう。プログラムは手品などの他の演目と一緒に編成され、演奏は三越音楽隊によるものだった。また、1923年に日比谷公園での「平和記念大会」が開催されたときには、音楽堂で少年少女大会も開かれ、そこで「早大管弦楽部員の奏楽」が行われた。1927年からはラジオ番組「子供の時間」の中でオーケストラによる演奏が放送され、その収録演奏会には子どもたちが聴衆として参加していた。放送は1938年頃まで続いた⁷⁾。

そしてイギリスでは、1886年から1897年にドイツ人指揮者のジョージ・ヘンシェル⁸⁾による「青少年のコンサート・シリーズ」⁹⁾が行われている。演奏は成人向けのコンサートと同様に、プロのオーケストラを用意した。19世紀半ば以前に発行された音楽雑誌において、「子どものためのコンサート」という言葉は、亡くなった音楽家の妻と子どものために、音楽職人組合（音楽家ギルド）が開催する慈善コンサートの意味で使用されていた¹⁰⁾。したがって、この場合のコンサートは、聴衆の対象が子どもというわけではなかった。

19世紀末になると、ヘンセルの子ども向けコンサートが行われ、1894年にはアニー・ミュアヘッドによる5回のコンサート・シリーズがケンジントンやハムステッドで開催されるようになる。ミュアヘッドのコンサートは好評を博したため、翌年には2か所で4回ずつの公演を行った¹¹⁾。プログラムの

内容は、オーケストラではなく、三重奏や四重奏、ピアノとヴァイオリンの合奏などが中心である。本コンサートの目的は、「子どもたちに正しい聴き方を身に付けてもらうこと」であった。

また、1911年には女性奏者で構成されたオーケストラの指揮者であったグイン・キンプトンが、ロンドンのエオリアン・ホールでシリーズを開始した。同様のコンサートが1918年からウォルター・キャロル博士の下でマンチェスターにて、1923年にはリバプールでラスワースによるコンサートがあった。

そして、1923年には本稿で取り上げるロバート・メイヤーによる子どものためのコンサート・シリーズが始まる。それまでのコンサートの中ではもっとも永続的な子ども向けコンサートであり、その誕生と発展については後述する。ロバート・メイヤーが子ども向けコンサートの基盤を固めたことから、1944年のアーネスト・リードによる子どもコンサートをはじめ、今日までの様々な子ども向けコンサートに大きな影響を及ぼしている。

4. ロバート・メイヤーという人物

子ども向けコンサートを上演し、成功をおさめたロバート・メイヤーとはどのような人物なのだろうか。

ロバート・メイヤーは、1879年にドイツ、マンハイムの醸造業を営む家で生まれた。6歳でマンハイム音楽学校に入学するが、両親の教育方針により15歳で退学し、ビジネスの世界へ飛び込む。そして、父親が毎年アイルランドとイングランドを訪れるほど熱烈な親英家であったことから、1896年17歳の夏に家族でロンドンへ移住した。1902年23歳でイギリス国民に帰化する。

1919年40歳で、歌手のドロシー・モウルトン(Dorothy Moulton)との結婚を機にイギリスからアメリカへ移住し、実業家として金属業で成功をおさめた。事業と並行して、夫婦で子どもたちに対する慈善活動も行っていた。このアメリカ生活の期間にメイヤー夫妻がダムロッシュの子どもコンサートをニューヨークで聴いたことが、ロンドンでの子どものための演奏会開催のきっかけとなる。そして、ロバートは子どものコンサートの領域を広げることに専心するため、1929年50歳で金属業から退く。そして、長年にわたる子どもと音楽の架け橋となった功

績が称えられ、1939年にナイトの称号が贈られた。

また、第二次大戦下でアメリカとイギリスの子どもたちを支援するために基金を創設したり、戦時中の若者の非行化に関するレポート『困難にある若者たち』（1945）を内務省に提出、出版したりするなど、慈善活動にも力を入れていた。本著は、一時期ロンドン大学政治経済総合学部で教科書としても使用されていた。

第二次大戦後、1954年75歳のときには、若者の音楽活動を支援する団体「Youth and Music」を設立する。若い演奏家の育成にも力を入れることで、さらに活動を広げた。

一方プライベートでは、彼の自宅の客間に若手演奏家を招き、彼の伴奏するピアノを囲んで楽器や歌が演奏されていたという。ちなみに、ロバートは法学博士（リーズ大学）、科学博士（シティ大学ロンドン）の学位を取得している。

作家でエッセイストのジャンストラザー¹²⁾は、ロバートの功労をハーメルンの笛吹に喩え、「彼は町に閉じ込められている子どもの長蛇の列を、何もかもが興味深い新しい地へと誘い寄せている。」(Mayer, Bander : 1969) と表現した。

ロバートは1985年に105歳でその生涯を閉じた。

5. ロバート・メイヤー・コンサートの誕生

初回は1923年3月29日に、2700席あるロンドンのウェストミンスターセントラルホールで行われた。若い聴衆に親しまれるように、指揮者は新進気鋭の当時34歳であったエイドリアン・ボウルト¹³⁾が起用された。コンサート当日はロンドンの交通ストライキと重なったにもかかわらず、300名の子どもが出席した。同年2回目には1000名、3回目には1360名にものぼった。この活動がロンドン議会音楽顧問の目にとまり、学校との関係を築くことになる。

第2シリーズには8つのコンサートを企画し、初回は2000人超が集まった。指揮者はマルコム・サージェント¹⁴⁾へ引き継がれ、第二次世界大戦まで彼の指揮で上演された。1938年にはヨークシャーやニューカッスル、ダービーなど25の都市で65のコンサートを開催するまでに拡大する。その後、1970年代には英国放送協会のBBCに運営が引き継がれた。

このように、ロバートはイギリスの若者たちへ生

演奏の音楽を提供するために、金属業で獲得した多大な資産を費やしてコンサートを運営していた。彼が90歳を迎えるころには、ロンドンにおいても500ものコンサートが開かれ、延べ150万人の子どもたちが参加したことになる。地方での公演も数多く行われた。

6. ロバート・メイヤー・コンサートの特徴

ロバート・メイヤー・コンサートの特徴は、音楽雑誌 *Tempo*¹⁵⁾ の1955年7月号の紹介文に表れている。

「一つ目に、入場料が他の優れたコンサートに比べて低く設定されていることである。二つ目に、楽曲解説が著名な専門家によってなされている。これは聴いた作品について更に学びたいと、若者たちに思わせるためである。三つ目に、オーケストラだけでなく他の幅広い価値ある音楽をシリーズに含めたことである。シューベルトの三重奏変ロ長調も聴けるが、デニス・ブラウン吹奏楽アンサンブルによるモーツァルトの五重奏も、すべての音楽愛好家が確実に楽しめるだろう。四つ目に、各コンサート時間は1時間半を超えないようにしている。」(Tempo: 1955: 7)

一つ目の入場料について、一流の出演者のコンサートであっても、子どもたちが自分のお小遣いでチケットを手に入れられる値段として、4ペンスを入場料に設定している。1894年に始まったアニー・ミュアヘッドのコンサートの入場料は10シリングで、前者に比べると高額である。後者はハムステッドやケンジントンといった高級住宅街での開催であったことから、上流階級の子どもを対象としていたと考えられる。よって、ロバート・メイヤー・コンサートはミュアヘッドのそれよりも幅広い階層の子どもたちを聴衆の対象としていたと言えよう。

二つ目の楽曲解説に関して、例えば1925年から1936年公演はエドウィン・エヴァンスが行っている。彼はロンドン生まれの音楽評論家で、ロンドン的高级夕刊紙であるポール・モール・ガゼットや大衆紙のデイリー・メールといった新聞の記事を執筆している。1935年の公演プログラムに掲載されているイギリス人作曲家ディーリアスの「春初めての

カッコウを聴いて」の解説を以下に紹介する。

「数多くのノルウェー民謡の中でも、グリーグがピアノのために魅力的な小曲へと編曲した「オーラの谷で、オーラの湖で」というタイトルの作品があります。この非常に愉快的な民謡はディーリアスもまた魅了し、彼もスカンジナビア民謡に対して偉大なる愛情を持っています。しかし、彼はそれを「グリーグとは」異なるように扱います。彼はそれを春の片田舎の美しく小さな風景へと変えたのです。そして仕上げとしてカッコウのさえずりを加えました。その鳥は常に作曲家たちのお気に入りでした。もっとも有名な例は、ダカンのクラブサン（昔の時代のピアノ）の作品です。ディーリアスは、自然の様子からインスピレーションを受けているときは、いつも最高の作品を書いていました。彼はいくつかの小さな音詩または音の風景のようなものを書いていきます。彼のオペラ『村のロミオとジュリエット』の中の「楽園への道」のように、彼の主な目的が自然の美しい様子を描くことでないとしても、それに抗うことができないのです。」 [] は筆者の補足

このように短い文章ではあるが、グリーグという有名な作曲家の話からはじまり、カッコウをテーマにした他の名曲にも触れるなど、一つの作品から知識の広がりを持たせた解説を行っている。

次に三点目のプログラムについては、一回のコンサートで4曲から6曲程度が演奏され、それらは交響曲から1楽章だけの抜粋や、劇中歌などで構成される。例えば、1925年11月21日の公演では、『ロシーニのセビリアの理髪師』より「序曲」、ベートーヴェンの「七重奏」と『交響曲第3番』より第3楽章、デイヴィスの「オルガンと管弦楽のための前奏曲」、グリーグの「抒情小曲集より第4曲」が演奏された。また、ヘンデル、パーセル、ディーリアスなど、ほぼ毎回においてイギリス人作曲家の作品を取りあげている。ロバートは90歳を迎えてもなお、選曲は自身で行っていた。

出演者も、指揮者にはマルコム・サージェントやエイドリアン・ボウルトなどのイギリス人を登用し、演奏者はロンドンフィル、サミュエル・カッ

チャー・カルテットなど、イギリスのオーケストラを登用していた。

最後の公演時間については、土曜日公演は午前中11時から、平日公演は午後3時半からであり、子どもたちの集中力を考慮して長時間にならないようプログラムを組んでいた。1シリーズは10月中旬から始まり、7回から8回行う。

また、一つ目の入場料を安く設定したことと関連して、イングランドの各地で偏りなく公演を行っていることも特徴的である。先程も述べた通り、ミュアヘッドの公演は上流階級が住むハムステッドやケンジントンを中心としていた一方、ロバートは貧しいイーストエンド地区のピープルズパレスでも公演を行っている。それは、ロバートがイーストエンドを歩いていた時に、貧困、騒音、そして美とハーモニーの欠如に愕然とした経験によるものだった。素晴らしい音楽の世界がこの地域の子どもたちにこそ必要だ、という強い思いから、地元の教員を企画ミーティングに招き、コンサート開催に至った。その時のコンサートの様子が以下のように述べられている。

「動物園のようだった。1600名の子どもたちはわめいたり叫んだり、お菓子の紙をかさかさ鳴らしたり、リンゴをむしゃむしゃ食べたりしていた。そのとき、サミュエル・カッチャーがバッハのヴァイオリン・コンチェルトを演奏するために立ち上がった。最初の音が巨大な劇場に高く舞上がったとき、子どもたちは一本のピンが落ちる音さえ聞こえるほど静まりかえった。最後には称賛の嵐が起きた。(略)」(Mayer, Bander : 1969 : 16)

貧困地区の子どもたちにも、ロバートの音楽は心に響いたのである。

以上、ロバート・メイヤー・コンサートの特徴をあげた。子どもに対する配慮が随所に感じられる公演内容である。次の節では、これらの特徴がどのような目的を達成しようとするなかで現れてきたのか、明らかにしたい。

7. ロバート・メイヤー・コンサートの目的

本コンサートの最も重要な目的は、子どもたちに

クラシック音楽への興味を抱かせ、音楽文化の発展と存続を意図した聴衆開発である。そのためには可能な限り多くの子どもたちが、生の音楽に親しむ必要があった。しかし、あえて入場料を無料にするのではなく、徴収している。このことについて、ロバートは以下のように述べている。

「私たちは、皆がコンサートに行くだけではなく、入場料を払う習慣を最初に身に付けてもらいたかった。それゆえ、4ペンスの入場料を課した。」(Mayer : 1979 : 22)

「戦後、私たちは学校の校舎で—それはとても好都合であるが—コンサートを始めた。しかし、彼らは学校カリキュラムの一部として、必然的に料金を無料にしなければならない。危惧していることは、児童が学校を卒業すると、コンサートを無意識に次の二つのことと捉えてしまうことだ。すなわち、強制的なもの、何も得るものがないもの、である。」(Mayer : 1979 : 71)

つまり、入場料を支払う習慣こそ、子どもたちが身に付けるべきだと考えていた。学校の音楽授業の一環では、プロの演奏が子どもたちに無料で提供される機会がある。しかし、これは強制的で、積極的に音楽を聴く姿勢が育たないとロバートは感じていた。それでは卒業してから入場料を支払うことに抵抗を感じてしまい、ホールに足が向かなくなってしまう。メイヤーはこの障壁を取り除きたかった。

そして、学校の音楽科のように聴取を強制するのではなく、以下のように、まずは音楽に親しむきっかけを与えたいとした。

「子どもたちに優れた文学作品を教えるように、優れた音楽作品を教えることは当然である。彼らはそれを理解しないかもしれないが、そのことは重要ではない。彼らは譜面が読めたとしても完全には理解しないだろう。主なねらいは、彼らに音楽の存在を気付かせることであり、彼ら自身に選択する機会を与えることである。」(Mayer : 1979 : 87)

以上のような聴衆育成のねらいと関連して、イギリスが音楽の後進国であるというイメージを払拭することも大きな目的であった。この思念は、メイヤーが後に立ち上げる青少年の音楽活動支援機関「Youth & Music」の活動に色濃く表れている。

8. コンサート誕生の背景

メイヤー夫妻はなぜこのような目的のもとにコンサートを行ったのだろうか。それには当時のイギリスにおける音楽を取り巻く状況がある。

先程も述べたように、イギリスは音楽の後進国であるというイメージがつきまとっていた。以下のように、ロバートはイギリス人のクラシック音楽コンプレックスと、それを強く否定するような発言をしている。

「ドイツ人作家が、イギリスを「音楽のない国」として描写した。(略)しかし、エリザベス女王時代のマドリガル作者だけでなく、古今を通じて最も偉大な作曲家の一人であるヘンリー・パーセルをも輩出した人々が、どのようにして非音楽的に描かれることができようか。イギリスの隅々にまでわたる村の偉大なるゴシック建築の教会で、昔から人々は歌っていたのだ。ヨークシャーまたはロンドンよりも優れた合唱隊は世界にはない。しかし、室内楽とオーケストラ音楽の洗練された大陸の流行のせいで、これらの事実は正しい価値として評価されなかった。」(Mayer : 1979 : 62)

「本当に最近まで、他の国々—主にドイツ圏—は、音楽領域を支配していた。我々は今になってはじめて、潜在的な指導者として出現するのだ。」(Mayer : 1979 : 81)

加えて、20世紀初頭のオーケストラ奏者の待遇は悪く、代役を置いていた。当時の状況をメイヤーはこのように語っている。

「かつて、ロンドンには単独の常設オーケストラを所有していなかったことを思い出さねばならない。今日、我々は5つも有している！当時、それはその場限りの雇われ演奏者であった。(略)世紀

の変わり目あたりまで、オーケストラの仕事は大雑把で、ときには実にひどかった。(略)オーケストラ奏者は給料がとても安いので、しばしば朝のリハーサルに出て、もしその合間により儲けの多い仕事を受ければ、「夜の部」は休んで代理の演奏者を送る。(略)当時の状況は、今日では考えられない。」(Mayer : 1979 : 64)

その当時、ロンドンに常駐のオーケストラがほとんど存在しなかったため、コンサートが催されるごとに演奏者を寄せ集めなければならなかったのである。

さらに、イギリスの音楽教育の事情も背景にあった。イギリスの学校教育における音楽科の導入は、1870年の公教育の始まりと同時になされた。1910年ごろには音楽鑑賞運動が活性化し、1924年には学校音楽放送が開始される。1927年にはそれまでの音楽科の科目名であった「唱歌 (singing)」が「音楽 (music)」へ変更された。つまり、1910年前後から20年代半ばにかけて、音楽教育とは歌唱だけではなく鑑賞や聴取にも教育が必要だという気運の高まりに伴い、ロバートのコンサートも注目されたと考えられる。

学校の音楽科で聴取教育にも取り組まれるようになったが、それは強制的なものとなり、子どもたちにとって音楽が退屈なものになってしまった。加えて、音楽科で使用する教材もまだまだ不十分であり、それも子どもを音楽から遠ざけてしまう一因となった。ロバートは学校教育について以下のように述べている。

「ある一定量の音楽が常に小学校の活動の一部になってきたことは真実である。しかし以前は、そのほとんどが讃美歌合唱か、学校で使用するために書かれた粗悪な音楽作品に限られていた。徐々に私たちと子どもたちに有益な領域があると実感させるような、ジョージ・ダイソン、アームストロング・ギブズなどによる作品へ置き換わっていった。(略)しかし、小学校はいまだに良い教師、適切なピアノとその他の必需品が奪われており、小学校を卒業した子どもたちが初見能力もないのは明らかだ。」(Mayer : 1979 : 87)

音楽後進国というイメージ、オーケストラ団員に対する不待遇、学校での音楽教育の欠陥、といった音楽界の悪状況に、ロバートは心を砕いていた。だからこそ、子どもたちに最高の教材を提供しようと、一流のプログラム、一流の演奏家、一流の解説を用意したのである。毎回のコンサートプログラムにはイギリス人作曲家の作品を組み込み、世界各国の演奏家がロンドンに足を運んでいたにもかかわらず、出演者をイギリス人で固めていたことから、イギリス人のクラシック音楽への劣等感を克服させようとしていたことが見受けられる。

また、このような様々な音楽啓蒙活動は、当然、学校外で行われていた。ロバートは学校での音楽教育に否定的な考えを持っていたが、彼の音楽活動は学校の教師側との対立を招いたのではなく、むしろ教師の熱心な活動に支えられていた。メイヤー夫妻は教師たちと幾度となく話し合いを重ね、音楽教育活動を教師とともに進めていた。以下、熱心な教師たちの協力もコンサート成功の要因であると語っている。

「振り返ると、この成功は主に3つの要因がある。素晴らしい音楽家と一流のプログラムに対して妥協しなかったこと、マルコム・サージェントを探り当てた幸運があったこと、数百数千の子どもたちをコンサートに連れて来てくれる教師の熱心な協力を喚起する力が我々にあったことである。」(Mayer : 1979 : 23)

「小学校教諭から高尚な監督官（際立った才能をもった3名、シビル・ウィン、ジェフリー・ショウ、バーナード・ショー）まで、教育者の熱心な支援があった。」(Mayer : 1979 : 86)

つまり、子どもたちの音楽に対する知的好奇心を刺激する活動は、学校の内外にかかわらず、教師と音楽事業者（演奏家）が積極的に関わりを持ち、互いに協力して為し得ることができるのである。メイヤー夫妻の活動は、その成功例の一つである。

そして、音楽家および演奏家の不安定な雇用への憂慮は、次世代を担う若手演奏者の育成活動を精力的に行う団体「Youth & Music」の立ち上げにつながるものであった。

9. 「Youth & Music」の創始

メイヤーは1954年75歳の時に「Youth & Music」を創設した。その目的は、音楽雑誌 Tempo1954年4月号に以下のようにある。

「一般の若者のあいだに音楽の趣味や音楽活動に対する知識、教養、関心の高まりを広げること、上演などに代表される「Youth & Music」の活動への積極的な参加を奨励すること、UK と他の国で有意義な情報を収集し、学び、循環させ、交換し、UK と「Youth & Music」の活動に関心のある他の国々において相互に訪問や交流を奨励して促進すること」(Tempo:1954: 6)

それまで主に初等教育段階の子どもたちを対象としていたコンサート活動を、25歳までの若者にも拡大して、定期的にオペラ、舞踊、コンサートへの参加を奨励し、未来の聴衆を形成することを設立の目的とした。例えば、若者でも手に入れられる価格でチケットを提供するために、まず「Youth & Music」がある公演チケットを一括予約して確保し、安価で若者へ販売する。これはロンドンの老舗劇場サドラーズ・ウェルズでのオペラの特別講演も含まれていた。その公演の聴衆であった子どもたちの97%がオペラを初めて鑑賞したという。

そもそも、「Youth & Music」は「ジュネス・ミュージカル」(Jeunesses Musicals)を模範として創設された。ジュネス・ミュージカルは、1940年に、ベルギーで創設された国際的運動である。その後、運動が広がり、1945年には「ジュネス・ミュージカル国際連盟」(Jeunesses Musicals International: 以下 JMI)が創設され、青少年音楽に関する世界最大の NGO となった。現在も活動は継続しており、若者が音楽に関わる機会を提供するグローバル・ネットワークとなっている。加盟団体は40か国におよび、連携組織は15か国、活動する国は80か国以上にのぼる。日本でも2001年までは活動が行われていた。13歳から30歳までのプロと若手音楽家に質の高い音楽活動と機会を提供し、国際レベルで国境を越えた交流の機会を調整する。

音楽雑誌 Tempo によれば、「ジュネス・ミュージカル」は「Youth & Music」の創設時、フランスだけで

もすでに20万人規模の大きさを誇り、政府から助成金を獲得していた。JMI 発足当初は、メイヤーのコンサートと同様に、コンサートを通じて若い観客に「良い音楽」(クラシック音楽)を提供することに重点を置いていたが、徐々に若手音楽家、音楽キャンプ、音楽コンクール、青少年オーケストラなどにも活動範囲を拡大した。そして60年代後半には、現代のクラシック音楽、民族音楽、伝統音楽、ジャズ、ポップ・ロックなど、他のジャンルへも門戸を広げた。「Youth & Music」は創設後、まもなく JMI に加盟した。1969年の時点で、「Youth & Music」支部はすでにバース、ベルファスト、グラスゴー、キルフォード、ハーロー、マンチェスター、ニューキャッスル、レディングへと分岐している。

「Youth & Music」は、若手音楽家にふさわしいコンサート舞台でのデビューの場や、留学のチャンスを与えるために、メイヤー夫妻は「モウルトナーメイヤー賞」を創設した。この恩恵を受けた者に、ニゲル・ケネディ¹⁶⁾ やリンダ・エステー・グレイ¹⁷⁾、イトキン・セオウ¹⁸⁾ も含まれている。メイヤーは、1970年のチャイコフスキー国際コンクールに同団体から18名が参加し、優勝者も出たこと、同じ年にあったコンクールで計16名が入賞、4名が優勝したと発言している (Mayer: 1979: 47)。今やイギリスのヨークシャテリア、ノースイースト、ノースウエスト、サウスウエストへと枝分かれし、有能な若手演奏家を「Jeunesses Musicals World Orchestra 青少年国際オーケストラ」¹⁹⁾へ参加させるために送り続けている。

10. まとめと考察

以上、ロバート・メイヤーの人生とその音楽啓蒙活動を通して、子どもたちへ音楽経験が提供される過程を明らかにしてきた。まず、ロバートは聴衆の育成のために、子ども向けのコンサートを始めた。そこでは、階層に関係なくできるだけ多くの子どもたちに、本物の生の音楽に触れさせる意図があった。結果的に、これはプロの音楽家を生み出す素地を用意したことになった。そして、初期のコンサートを聴いていた世代が成人になると、愛好家として音楽界を支える構造が出来上がる。その時期を初回コンサートからほぼ30年と考えるならば、ロバート

が若者と音楽をつなぐ「Youth & Music」を立ち上げた時期と重なる。

また、組織の運営のために数々のスポンサーを獲得し、一流の音楽家との交渉を行い起用するなど、実業家として成功した経験が生かされている。貧困地区の子どもたちにも注目して他の地域と同様のコンサートを開催するに至ったことは、戦中期に慈善家として精力的に活動したことを鑑みれば当然のことであった。ロバートが幼少期に入学した音楽学校から退学せずに、そのままプロのピアニストになっていたのなら、ここまで大規模な活動は成しえなかっただろう。

メイヤー夫妻は、音楽の才能の発掘というよりは、まずどのような子どもでも音楽に触れられる機会を提供することが急務だと感じていた。本稿冒頭で触れた神童の育成と比較するならば、メイヤーは聴衆の育成という包摂を行い、その中から才能ある者が自然と現れるような仕組みを築いた。音楽家を志望する若者に演奏の場を提供する「Youth & Music」の支援は、本人の意思を尊重しているといえる。

最後に、本稿ではロバートの妻ドロシーについてはほとんど触れることができなかった。彼女も子どものためのコンサートの共同発案者である。彼女は歌手や伝記著者の顔も持っているうえに、音楽学の博士号も取得するほど有能である。そして、1950年前後からアイルランドで子ども向けコンサートを始め、アイルランドでの音楽教育活動も行っていた。彼女なしにはロバート・メイヤー・コンサートの成功はあり得なかった。よって、彼女の活動も詳細に追うことで、子どもと音楽の関係をより重層的に捉えることが可能となるだろう。

注

- 1) 神童現象については、ホフマンの研究(2004)ほか、竹山(2009)がある。
- 2) 本稿ではイングランドを指す。
- 3) Walter Damroch(1862-1950)ドイツ人音楽家の家系に生まれ、1871年に渡米した。父親はメトロポリタン劇場で指揮をし、ダムロッシュはその助手を務め、1890年からはニューヨーク交響楽団で指揮者となる。ダムロッシュ歌劇団を設立し、1925年からは成人向けラジオコンサートを始める。1928年から42年までは全米規模の学校放送に携わる。

- 4) 大友、津上、有田(2015)
- 5) 1873、1879、1883、1891
- 6) Leonard Bernstein(1918-1990)アメリカ人作曲家、指揮者、ピアニスト。
- 7) 大友、津上、有田(2015)
- 8) George Henschel(1850-1934)ドイツのプレスラウ生まれ。イギリスでのデビューは、1877年2月19日のポピュラーコンサートで、1884年からイギリスに定住する。
- 9) Rainbow(1989)
- 10) 詳細は村知ほか(2018)の第9章(水引著)を参照。
- 11) 竹山(2010)
- 12) Jan Struther(1901-53)英国の作家。
- 13) Adrian Boult(1889-1983)イギリスの指揮者。
- 14) Harold Malcolm Watts Sargent(1895-1967)イギリスの指揮者。
- 15) 1939年に創刊し、現在に至る。年4回発行の季刊紙である。
- 16) Nigel Kennedy(1956-)イングランド生まれのヴァイオリン奏者。
- 17) Linda Esther Gray(1948-)スコットランド生まれのソプラノ歌手で指導者。
- 18) Yitkin Seow(1942-)シンガポール生まれのピアニスト。
- 19) 若手音楽家に最高レベルの音楽機会を提供し、世界平和と異文化理解のための大使として毎年2回ツアーを行っている。1949年にイゴール・マーケディッチによって発表され、1969年に青少年音楽オーケストラとしてジル・レフェブレによって制度化された。オーケストラはすぐに高い芸術的品質の評判を得て文化理解と国家間の平和協力の象徴となり、1996年には人道的なメッセージを受けて平和のためのユネスコ芸術家の称号を授与された。設立以来、45カ国から1万人以上のミュージシャンが集まり、世界中で演奏され、多くの青少年オーケストラの創設に影響を与えた。

参考文献

- 大友直人、津上智実、有田栄(2015)『わからない音楽なんてない!子どものためのコンサートを考える』アルテスパブリッシング
- 小林美貴子(2011a)「20世紀初期イギリスにおける音楽鑑賞教育に関する研究」『音楽教育史研究』13号 pp.15-26
- (2011b)「20世紀初期のイギリスにおける音楽教育課程に関する書に見られる特徴」『音楽学習研究』7号 pp.47-56
- 是澤優子(2008)「大正期における三越児童博覧会の展開」『東京家政大学博物館紀要』第13集 pp.39-46
- 村知稔三、佐藤哲也、鈴木明日見、伊藤敬佑編(2018)『子ども観のグローバル・ヒストリー』原書房
- 武内裕明(2007)「全米ラジオ音楽教育番組成立期の音楽鑑賞教育の特徴」『音楽文化教育学研究紀要』19巻 pp.83-94
- (2008)「全米学校放送開始期の音楽鑑賞番組「音楽鑑賞アワー」に関する研究:子どものためのコンサートからラジオ教育放送への移行期のプログラム構成に

着目して』『日本教科教育学会誌』31巻（3）pp.12-25
竹山貴子（2009）「＜小さな演奏家＞の受容形態に関する一考察 — ホフマンの神童論に着目して —」『人間文化創成科学論叢』第12巻 pp.249-256
——— [口頭発表]（2009）「聴衆としての子ども — 子ども向け演奏会の成立と思想背景 —」『日本保育学会』第62回大会、千葉大学
——— [ポスター発表]（2010）「19世紀イギリスにおける子ども向け演奏会の実態に関する一考察」『日本保育学会』第63回大会、東雲女子大学・短期大学
フライア・ホフマン著、玉川裕子訳（2004）『楽器と身体 市民社会における女性の音楽活動』春秋社 ニューグロブ世界音楽大事典
Bernarr Rainbow, Gordon Cox（1989）*Music in Educational Thought and Practice*, THE BODYDELL PRESS
Freia Hoffmann（1984）Miniatur-Virtuosinnen, Amoretten und Engel, in: NZ Jg. CXLV, H. 1, S. 11-15

Meirion Hughes, R.A.Stradling（2011）*The English Musical Renaissance 1840-1940*, MANCHESTER
Robert Mayer, Peter Bander（1969）*ETERNAL YOUTH & MUSIC*, COLIN SMYTHE
———（1979）*MY FIRST HUNDRED YEARS*, VAN DUREN
ロバートメイヤーコンサートプログラム（1925、1933、1934、1935、1936）
ロバートメイヤーコンサートリーフレット（1925、1926、1927、1928、1930、1931、1933）
“Concerts, Commentaries & Children” *READER'S LETTERS*
“Youth and Music” *Tempo* 1954/4,1955/7

受付日：2018年3月9日

受理日：2018年4月22日